巻頭言

# “親方”の要件 ー惚れさせるー

株式会社　熊谷組
代表取締役会長　大田　弘

昨年、黒部川第四発電所（富山県／関西電力）は完成50周年を迎えた。当時の戦後復興にあたっての大きな課題のひとつが急増する電力需要への対応であり、「電気を寄こせ！」の大規模デモが発生する時代でもあった。

関西電力は急峻で水量が豊富な黒部川の最上流付近に水力発電所の建設を決断したが、前人未到の秘境に高さ186m、総貯水量2億㎥のアーチダムなどを建設するにあたっては、先ずは大量の資機材の運搬ルートを確保することが必須条件であった。

そのルートとして長野県大町（標高1500m）から発電所建設地点に県境越えの北アルプス縦貫トンネル道（約5㎞）が選定された。

昭和31年8月、熊谷組は掘削を開始、当時の日本記録樹立（月進335m）の快進撃が続いた。しかし昭和32年5月、坑口から1700mの地点で大断層「破砕帯」に遭遇した。脆弱な地盤と毎秒600リットルを超える摂氏4℃の地下水に阻まれ、1㎝も進めない事態に陥った。

「破砕帯はどこまで続くのか？」「地下水は減るのか？」先行きが全く見通せない中で〝山を下りる〟作業員が続出し、現場の士気は著しく低下、工事に暗雲が立ち込めた。

苦悩の真っ只中、関西電力社長・太田垣の現地視察が運命を変えた。

『この先は非常に危険です。いつ崩落・崩壊するかわかりません』掘削の最前線の切羽に進もうとする太田垣を周囲が制止した。

その時、太田垣はこう言った。

『君、何を言っているのかね！ずっと奥で働いている人間がいるじゃないか。その危険な仕事を命じている会社の責任者である私が行けないとはどういうことかね』と。

そして『ご苦労さん、大変な工事だね。どうかね？掘れそうかね』作業員にこう声を掛けながら奥へ奥へと進んでいったのである。

翌日、最前線の指揮者、熊谷組笹島班長（後に映画「黒部の太陽」のモデル（主演／石原裕次郎）となる）に一枚の葉書が届いた。

『大変な難工事だと思いましたが、皆様方の明るい元気な顔を見て安心しました。日本の土木の名誉にかけて頑張ってください。ご健闘を祈ります。太田垣士郎』

笹島はすぐに作業員を集め、葉書を読み上げて檄を飛ばした。

『みんなよく聞け。この前、太田垣社長は余程の決意を持って現場に来られたのだ。我々作業員と同じ立場、同じ目線に立とうとしておられる。発電所建設の成否は我々の肩に掛かっている。土木の名誉なんて難しいことは分からないが、下請けの意地にかけて破砕帯を突破する！』

笹島は太田垣に完璧に惚れた。1500名の労務者が働く現場は一転して勢いを取り戻した。7カ月間を要した破砕帯区間は僅か80mであった。

不可能といわれた破砕帯突破の理由を当時の工事関係者は、口を揃えて次のように語っている。

『発注者の関西電力、元請の熊谷組、そして下請けの笹島班が「誰の責任とかではなく、やるべきことは全てやろう」と、それぞれの立場を越えて全員の心が一つになったこと』だと。

クロヨンが我々に遺したもの、それは戦後の経済発展（お金）と巨大ダム・技術（物）である。しかし、お金にも物にも代え難いもっと凄いものを遺した。それは「絶対に諦めないとの不屈の精神」と「全員で力を合わせることの大切さ」、〝人間力発揮〟のあり方である。

笹島は部下・人の使い方をこう説く。『怒鳴っても駄目、甘やかしても駄目、惚れさせること』だと。

発電所は今も多くの人々の手によって維持管理されている。過ぎる豊かさを享受する日本。その豊かさと引き換えにどこかに置き去りにしてきた日本人の魂、日本人の志をもう一度、取り戻す必要があるかと思う。

（敬称略）